THE BEATLES

John Lennon / Paul McCartney / George Harrison / Ringo Starr

KUNIHIKO FUJIMOTO'S 30+ RECOMMENDED BEATLES LPS

ビートルズ研究家 藤本国彦 リコメンド LPベスト30+

The Beatles
ビートルズ(1968)

アップル・レーベルからの最初の作品となった 2 枚組。通称ホワイト・アルバム。A 面はバンド・サウンド、B 面は小品、C 面はハード・ロック、D 面は「レボリューション 9」ほか種々雑多な曲…と、4 人の個性が顕著になり、ビートルズの幅広い音楽性を知ることができる。

The Beatles

Abbey Road
アビイ・ロード(1969)



ジョンの思いがビートルズ（ポール）からヨーコへ移り変わるなか、ポール主導で制作された、実質的に最後のスタジオ・アルバム 。ジョージの名曲「サムシング」「ヒア・カムズ・ザ・サン」と、プロデューサー、ジョージ・マーティンのアレンジが冴える B 面メドレーは圧巻。

The Beatles

A Hard Day's Night
ハード・デイズ・ナイト(1964)



ビートルズならびにジョンの傑作とまで言われることもある、初の主演映画のサウンドトラック的な一枚。初期アイドル・バンドとしての全盛期の作品で、先行シングル「キャント・バイ・ミー・ラヴ」などでジョージが使用した 12 弦ギターは、バーズにも多大な影響を与えた。

The Beatles

Chaos and Creation in the Back Yard
ケイオス・アンド・クリエイション・イン・ザ・バックヤード(2005)



ポールが、ジョージ・マーティンの勧めにより、レディオヘッドなどを手がけたナイジェル・ゴッドリッチと組んで（ほぼ）一人多重録音で臨んだ、21 世紀で最もビートルズを感じさせる傑作。豊潤なメロディが次々と出てくるのは、ポールを本気にさせたナイジェルの功績大。

Paul McCartney

Ram
ラム(1971)



妻リンダとの共同名義で発表された傑作ソロ。あらゆるポップ・ミュージックをポール印に染めることのできる天性の才能が遺憾なく発揮された名作。ジョンを批判した「トゥー・メニー・ピープル」や「バック・シート」をはじめ、縦横無尽に繰り出される名曲ばかり。

Paul & Linda McCartney

Revolver
リボルバー(1966)



曲調の幅広さでは『ホワイト・アルバム』の先駆けとも言える、21 世紀に入ってから 1、2 を争う人気アルバムとなった中期の傑作。デビュー前にハンブルクで知り合ったクラウス・フォアマンによるジャケットも秀逸。アルバム完成直後にビートルズは日本にやってきた。

The Beatles

Rubber Soul
ラバー・ソウル(1965)



冒頭の「ドライヴ・マイ・カー」をはじめ、ブラック・ミュージックへのビートルズの回答と言ってもいい曲が耳に残る、名曲揃いの一枚。21 世紀になってスタンダード化した「イン・マイ・ライフ」ほか、ジョンとポールの力が拮抗した、『リボルバー』と並ぶ中期の傑作。

The Beatles

John Lennon/Plastic Ono Band
ジョンの魂(1970)



ビートルズ解散後の、初のソロ・アルバム。プライマル・スクリームと呼ばれる精神治療の影響を受けたジョンが、「マザー」や「ゴッド」をはじめ、幼少期のトラウマを乗り越えるために自分と向き合い、もがき苦しみ、赤裸々に自己表現したビートルズ離脱＝独立宣言作。

John Lennon

Magical Mystery Tour
マジカル・ミステリー・ツアー(1967)



BBC で放送された自主制作映画と連動した、『サージェント・ペパー』と並ぶサイケデリック時代の傑作。2 枚組 EP（6 曲入り）にシングル「愛こそはすべて」や「ハロー・グッドバイ」などを加えたアメリカ編集盤が、87 年の CD 化の際にオリジナル・アルバム扱いになった。

The Beatles

Imagine
イマジン(1971)



2 枚目のソロ・アルバム。ヨーコの詩集に触発されて理想の世界を歌に込めた「イマジン」や「ジェラス・ガイ」、ポールをやりこめた「眠れるかい？」をはじめ、ジョンの強さと弱さが共存した名盤。フィル・スペクターとの共同プロデュース作で、ジョージも参加。

John Lennon

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band
サージェント･ペパーズ･ロンリー･ハーツ･クラブ･バンド（1967）



ジャケット・デザインを含め、20 世紀のロックの名盤として必ず選ばれる一枚。冒頭のタイトル曲からアンコールの「ア･デイ･イン･ザ･ライフ」まで、ライヴ活動をやめたビートルズが他のバンドになりすまし、レコード上でライヴを行なうというコンセプトが素晴らしい。

The Beatles

Living in the Material World
リヴィング･イン･ザ･マテリアル･ワールド（1973）



物質社会を批判したタイトル曲（リンゴ参加）をはじめ、インド音楽・宗教・哲学にのめり込んだジョージの思想が最も反映された、実質的に 2 枚目のソロ･アルバム。「ギヴ･ミー･ラヴ」が米 1 位の大ヒット。メロディの良さが引き立つ味わい深い佳作も多数収録。

George Harrison

George Harrison
慈愛の輝（1979）



ジョージが自分の名前をタイトルに付けた自信作で、滋味あふれる AOR 風のサウンドが心地よい。息子ダニーが生まれた影響もあり、「愛はすべての人に」をはじめ、パンク全盛の時代に捉われることなく、自然体で音楽と向き合う。名邦題でも知られている。

George Harrison

All Things Must Pass
オール･シングス･マスト･パス（1971）



ビートルズ解散後に発表されたジョージの実質的な初ソロ作。ビートルズ時代から書き溜めていた曲などが 3 枚組（2 枚組＋スタジオ・セッションをまとめたボーナス LP）としてまとめられ､大ヒット。盗作騒ぎとなった「マイ･スウィート・ロード」も収録。

George Harrison

Brainwashed
ブレインウォッシュド（2002）



ジョージの死後、息子ダニーがジェフ・リンと共同で仕上げた遺作で、タイトル曲は、ジョンと並び本質を見抜く鋭さのあるジョージならではの、痛烈な社会（世界）批判。ジャケットにジョージの想いが込められている。現代の AI 時代をジョージはどう思うだろうか。

George Harrison

Cloud Nine
クラウド･ナイン（1987）



元 ELO のジェフ・リンの尽力により「セット・オン・ユー」がアメリカ 1 位の大ヒット。80 年代前半は表舞台にほとんど登場しなかったジョージを再び第一線へと引き上げた。ビートルズへのオマージュ「FAB」にはリンゴやエルトン・ジョンも参加。MV も話題を呼んだ。

George Harrison

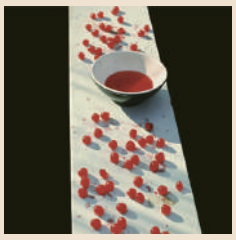
Please Please Me
プリーズ･プリーズ･ミー（1963）



わずか 1 日でレコーディングされたビートルズのデビュー・アルバム。キャヴァーン・クラブでの荒々しいステージをスタジオで再現したいというジョージ・マーティンの意図を反映した、パンク・ロックの元祖的作品。「ツイスト・アンド・シャウト」のジョンの絶唱は必聴。

The Beatles

McCartney
マッカートニー（1970）



ビートルズ脱退公表直後に発売された初ソロ作。69 年秋のジョンの脱退宣言にショックを受けたポールが農場に引き籠り、リハビリのために作った元祖宅録アルバム。名曲を期待したファンに肩透かしを食わせた実験精神満載の、これもまたポールならではと言える作品。

Paul McCartney

Back to the Egg
バック･トゥ･ジ･エッグ（1979）



60 年代の最後に『アビイ・ロード』を作ったポールが、70 年代の最後を飾ろうという想いで作ったと思しき力作。UK ロックの代表的なミュージシャンを集めてロックとオーケストラの融合をはかった「ロケストラのテーマ」は、その象徴的一曲だ。ウイングスの最終作。

Paul McCartney &Wings

With The Beatles
ウィズ･ザ･ビートルズ（1963）



ビートルズの中で最も R&B 色が強く、UK のビート・バンド好きにもお勧めの通好みの一枚。アルバム制作時に出演した BBC ラジオ音源や「オール・アイヴ・ゴット・トゥ・ドゥ」などで、ジョンの艶やかな歌声が堪能できる。ポールの初期の傑作「オール・マイ・ラヴィング」も収録。

The Beatles

Tug of War
タッグ･オブ･ウォー（1982）



スティーヴィー・ワンダーとのデュエット曲「エボニー・アンド・アイヴォリー」が話題となった、ジョンの死後に発表されたビートリーな傑作。プロデューサーにジョージ・マーティン、エンジニアにジェフ・エメリックを迎え、リンゴやカール・パーキンスらも参加。

Paul McCartney

Flowers in the Dirt
フラワーズ･イン･ザ･ダート（1989）



エルヴィス･コステロの助言によりヘフナーのヴァイオリン･ベースを再び手にしたポールが、二人の共作･共演曲「マイ･ブレイヴ・フェイス」でビートルズ・サウンドへ回帰。「ディス・ワン」はジョージへのオマージュ。10 年ぶりのライヴ活動復活へも弾みをつけた。

Paul McCartney

Ringo
リンゴ（1973）



ジョンの「アイム･ザ･グレーテスト」、ポールの「シックス･オクロック」､大ヒットしたジョージとの共作「想い出のフォトグラフ」と、レコード上でビートルズ再結成を実現させたリンゴの最高傑作。ザ・バンドのメンバーやマーク・ボランも参加したロックの一大絵巻。

Ringo Starr

Wild Life
ワイルド･ライフ（1971）



ライヴ活動再開を望んでポールが結成したウイングスのデビュー･アルバム。ボブ･ディランの『新しい夜明け』の“ 即席録音”に感化されたポールが数週間で仕上げた通好みの一枚。DJ 感覚をも感じさせる刺激的な音は、聴くたびに魅了される麻薬的効果がある。

Paul McCartney &Wings

Beatles For Sale
ビートルズ･フォー･セール(1964)



チャック・ベリー、リトル・リチャード、カール・パーキンス、バディ・ホリーなどのカヴァー曲を収めた、ビートルズのオリジナル･アルバムの中で最もカントリー色の強い一枚。「ヘルプ！」の前奏曲とも言えるボブ･ディラン調の「アイム･ア・ルーザー」も収録。

The Beatles

Let It Be
レット･イット･ビー(1970)



もともとグリン・ジョンズのプロデュースにより『ゲット・バック』のタイトルで制作されていたアルバムが棚上げとなり、最終的に映画『レット・イット・ビー』と歩調を合わせるためにフィル・スペクターが仕上げを任されたビートルズのラスト・アルバム。

The Beatles

The Boys of Dungeon Lane
ダンジョン･レインの少年(2026)



83 歳のポールがアンドリュー・ワットと組み、リヴァプールでの子ども時代や、若きジョンとジョージとの想い出を曲に込め、リンゴと交互に歌う「ホーム・トゥ・アス」を含む“ 4 人の共演作”として仕上げた驚異的な傑作。「ライフ･キャン・ビー・ハード」は今世紀随一の名曲。

Paul McCartney

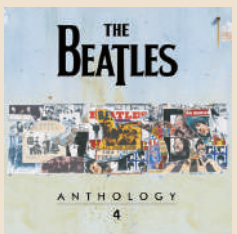
Live! at the Star-Club in Hamburg, Germany; 1962
ライヴ！ビートルズ･ライヴ'62(1977)



60 年 8 月、ドラマーにピート・ベストを加えて“ 武者修行”のためドイツのハンブルクに向かったビートルズが、契約の関係で 62 年 12 月末に最後（5 回目）の出演を果たした際に録音された貴重な音源。『プリーズ・プリーズ・ミー』のライヴ盤のような味わいがある。

The Beatles

Anthology 4
ザ･ビートルズ･アンソロジー4(2025)



ビートルズの未発表音源・映像集『アンソロジー』(95 ～ 96 年)の新装版に合わせて新たに作られた一枚。「テル･ミー･ホワイ」と「イン・マイ・ライフ」の初期テイクや、ラリッた「ベイビー・ユー・アー・ア・リッチマン」など、臨場感溢れるスタジオでの様子が伝わる。

The Beatles

Double Fantasy
ダブル･ファンタジー(1980)



ポールの「カミング・アップ」(80 年）に触発されたジョンが、対話の重要性を意図してヨーコと交互に曲が出てくるように構成した 5 年ぶりの新作(復活作)。先行シングル「スターティング・オーヴァー」や「ウーマン」をはじめ、新たなメンバーと制作した意欲作にして遺作。

John Lennon & Yoko Ono

The Beatles
Yellow Submarine(1969)



名作の誉れ高い同名アニメ映画のサウンドトラック盤。67 年から 68 年にかけてのアウトテイク（「イッツ･オール･トゥ･マッチ」「ヘイ･ブルドッグ」ほか）を LP の A 面に、ジョージ･マーティン･オーケストラの演奏を B 面に収録した、“ハーフ･オフィシャル”な内容。

The Beatles

Help !
ヘルプ！(1965)



2 作目の同名主演映画のサウンドトラック的な一枚。コーラスを多用したギター・バンドとしての完成形と言える中期の作品。当初は地味な存在だったポール作の異色のソロ曲「イエスタデイ」は、メロディのあまりの良さでスタンダード化。世界で最もカヴァーされた曲になった。

The Beatles

Walls And Bridges
心の壁、愛の橋(1974)



ヨーコと別居（「失われた週末」）中にジョンが制作した、最高傑作の誉れ高い一枚。エルトン・ジョンとの共演曲「真夜中を突っ走れ」がアメリカで 1 位を記録。恋人メイ・パンも参加した夢心地な「夢の夢」や、ファンキーな「ホワット･ユー･ガット」ほか名曲揃い。

John Lennon

The Beatles Live at the BBC
ザ･ビートルズ･ライヴ･アット･ザ･BBC(1994)



62 年（デビュー前）から 65 年まで、頻繁に出演していた BBC ラジオでの音源をまとめたシリーズ 1 作目。「213 曲」に入らなかったカヴァー曲のヴォーカルと演奏が素晴らしく、自作曲の少ないジョージの活躍が目立っている。音楽性の幅広さもビートルズならでは。

The Beatles

Band on the Run
バンド･オン･ザ･ラン(1973)



レコーディングでラゴスへ向かう直前にメンバー 2 人が脱退し、闘志に火が点いたポールが逆境を乗り越えて制作。3 部構成のタイトル曲や「ジェット」をはじめ、『アビイ･ロード』的な構成がお見事。『ヴィーナス・アンド・マース』と並ぶウイングスの最高傑作と評される。

Paul McCartney &Wings

Ringo's Rotogravure
リンゴズ･ロートグラヴィア(1976)



EMI からポリドールに移籍したリンゴが心機一転、『リンゴ』の時と同じく（主夫時代の）ジョン、ポール、ジョージの援助を得て制作した快作。ポールの「ピュア･ゴールド」は“ 隠れた名曲”。リンゴは、CM 撮影も兼ねて、アルバム宣伝のために 10 年ぶりに日本にやって来た。

Ringo Starr

Rock 'n' Roll
ロックン･ロール(1975)



ヨーコとの別居中にフィル・スペクターをプロデューサーに迎え、ジョンが歌手に徹して制作されたジョン版『ゲット・バック』アルバム。酒とクスリまみれの惨憺たるセッションの中から使える音源にジョンが手を加えて完成。「スタンド･バイ・ミー」は、原曲を超える名曲。

John Lennon

藤本国彦（ふじもと・くにひこ）プロフィール

音楽情報誌『CD ジャーナル』編集部(1991 年～ 2011 年)を経て 2015 年にフリーに。主にビートルズ関連書籍の編集・執筆・イベント・講座・ツアーなどを手掛ける。主な著作は『ビートルズ 216 曲全ガイド』（シーディージャーナル)、『ゲット・バック・ネイキッド』（牛若丸／増補新版は青土社)、『ビートル・アローン』（ミュージック・マガジン)、『ビートルズ語辞典』（誠文堂新光社)、『ビートルズはここで生まれた』（CCC メディアハウス)、『ジョン・レノン伝 1940-1980』（毎日新聞出版)、『気がつけばビートルズ』（産業編集センター)、『365 日ビートルズ』(扶桑社)。最新著作は『ポール・マッカートニー伝』(毎日新聞出版)。映画『ザ・ビートルズ～ EIGHT DAYS A WEEK － The Touring Years』『ザ・ビートルズ：Get Back』『ポール・マッカートニー：マン・オン・ザ・ラン』『パワー・トゥ・ザ・ピープル：ジョン＆ヨーコ・ライヴ・イン・NYC』ほか多数の字幕監修／監修(ピーター・ホンマ氏と共同)も担当。相撲とカレーと猫好き。

